

教育研究所の「研修」は、どのような研修なのか

教育研究所 所長 佐伯 胖

本巻は第66期研修員のみなさん8名の論文を中心としています。第66期の研修員は平成24年4月に、長野県教育委員会による研修派遣として、信濃教育会教育研究所に入所され、2年間の研修の成果をまとめました。平成24年4月から、佐伯胖が新しく所長として着任しましたので、第66期のみなさんは、佐伯所長の一期生ということになります。

私はこちらの所長に赴任する前に、長年大学教員をつとめており、都道府県から派遣された現職教員の研修を担当したことがありましたので、本研究所での「研修」については、大学で受け入れていた派遣研究生の研修のようなイメージをもっておりました。つまり、なんらかのテーマのもとに、国内外の論文や専門書を読み、場合によっては調査したりして、何らかのレポートを書く、というようなことを想像していました。しかし、当教育研究所での研修は、そのような研修とは全く違うものでした。研修員のみなさんは、それぞれのこれまでの自分の授業等について、徹底した「振り返り」をする、ということです。一人ひとりの生徒とどう向き合い、どうかかわったか。彼らの思いや願いをどう受け止めたか—まさに、「教育実践のさなか」での教師のありよう、考え方、感じ取り方、などを徹底的に検討し吟味するのです。これは研修員にとってはものすごくキツイことです。自分自身の人間そのものが問われるからです。こういう研修ですから、研修で身についたことというのは「ひとことで言えない」ことばかりです。新しい「専門的」知識や技能が身についたわけではありません。

しかし、米国で専門職教育に革命をもたらしたドナルド・ショーンの『専門家の智慧—反省的実践家は行為しながら考える—』（佐藤学・秋田喜代美訳、ゆるみ出版、2001年）は、これまでの専門職教育が、実践を離れての知識・概念・技術の習得を最優先してきたことを徹底批判し、大切なことは「実践のさなか」で、瞬間的に振り返る力（Reflection-in-Action）こそが、専門職教育で最も重視すべきであると強く訴えました。私は研究所での研修員の「振り返り」とそれへの厳しい指導におつきあいして、そういう「実践のさなかでの振り返り」に、すばらしい知見、すばらしい「わざ」が埋め込まれていること、それらが掘り起こされることを目の当たりにしました。本研究所の「研修」こそが、本当の意味での研修なのだ、自信をもって公言したいところです。したがって、2年間の研修をされたみなさんは、ほんとうの意味での「専門家」としての誇りと自信をもって、これから大いにご活躍いただきたい。

(2014年3月31日)